WASON
1889

女學雜誌

一冊六錢
當府内無郵税

版權所有
各土曜日出版

明治廿二年(第百五拾五號)三月三十日發

社説
忠臣二君に仕へず、貞女兩夫に見ゑず

論説
婦人の王國(其四)(平岩恒保述)

批評
立志之礎○貴婦人會話篇

叢話
棄婦行(石橋忍月)○婚姻せざる可らざる乎○わかざくら(飄夢)○旅のはぢ(むらさき)

小説
理想の紳士第九回(月の舎しのぶ)

寄書
和歌○日本の爲めに涙を流せ(佐々木笑受郎)

新報
四月○梅田千代女史死す○妻の財産と女權擴張、附り、獨逸國ミユンヘン府來報○當今の禁酒事業○何等の賄賂なるぞ○熊本人の大恥辱○音樂會○教育品展覽會○結婚媒妁の統計○其他數件

外報
ライルラルド孃自傳○メソヂスト女子傳道會○姦淫制止會○憲法及經濟學

附録
婚姻説○女子讀本○女子生理

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 155. March 30th, 1889.

EDITORIAL:—A Loyal Subject does not serve Two Masters; or a faithful Wife Marry Twice.

LEADING ARTICLES:— The Women's Kingdom. by Mr. Y. Hiraiwa.

CRITICAL NOTES:— "Self-help."

MISCELLANIES:— "Desertion." "Is Marriage a Necessity?" "Disgraces of a Journey."

NOVELS:— "The Ideal Beau."

CORRESPONDENCES.

GENERAL NEWS.

女學雜誌は日本の女性を代表す、日本の女性は女學雜誌の如くあり、亦如くなるべし、亦如くならざる可らず。日本の女性を知らんと欲せば女學雜誌を見よ、之に愛せられんと欲せば女學雜誌に愛せられよ。女學雜誌は日本婦人の分身にして、亦た其の敎師、案內者、相談相手たるなり。

●珊瑚の珠

○料理鹽梅談

三好長慶が庖人坪內某信長公の手に生捕て後年月を經て賄頭市原五右衛門より出頭人菅谷九右衛門を以て伺ひけるは四人坪內事は流石三好家の料理人鶴鯉の庖丁はもとより七五三饗の膳なにごとも法式知らざることなし何卒囚人御免あそばされ御料理人に召加へられたくと申上れば信長公左あらば試に今宵の料理申付よとの御意により其晚の御料理坪內自から調味して御膳を上るしかるに其料理御意に叶はず以の外の御怒なり坪內承り恐入て何とぞ今一度仰付られ下さるべく其の上御意に不叶とあらばいか樣にも御成敗下さるべしと申すこの由言上するに其通り仰付らる坪內又謹で調味し奉る處其鹽梅魚鳥の取合ことごとく御意に叶ひ信長公御機嫌直り實に天晴の料理かなと大に褒稱して更に召出し祿を賜ふ後に御意に入たるは第三番通りの鹽梅に仕立たり三好家は筑前守長輝より長秀、長基、長慶、義繼まで五代足利家の御風儀にならひ万に上向ある家風にて料理なども風流のとのみなり第三番の料理といふは遙に下劣にて田舍仕立の鹽梅が却て御意に入たりといふ聞人信長公に耻辱を與へ參らせしと笑ひたり。

女學雜誌　第百五十五號　明治二十二年三月三十日發兌

社説

○忠臣二君に仕へず、貞女兩夫に見えず。

大凡そ物其の平を得ざれば鳴る、波の轟ろくや水に平ならざる所あれば也、風の哮るや氣に平ならざる所あれば也、人民の囂々たるや權に平ならざる所あれば也、此を以て天は斷えず調和の策を施こし、地は止みなく經濟の政を布き、其平ならざるの未だ太甚しからざるに於て先づ之れを整ふると云ふ。左れば古今の名相賢臣は深く此の天理を推窮し、細かに物事の對數を量りて權衡を預じめ制す、學者之を稱して能く大勢を轉ずと名づく、蓋し需要供給の道を察して天下の大鳴を未發に防ぐものか、之れ即ハち經濟學上に於て頗ぶる豪傑の偉策と云ふ所ろのもの也。之を以て昔し佛國のルイ王第十五世は市場の利子を制して高きを低くきに就かしめたり、又アーサーヤングの辨によれば或る時は市に於て一人小麥二ブッセルの外か多く買ふとを得ざらしめしあり、其他濫用を禁じて商品の賣行を引しめ、食物の價格を定めて饑饉の襲來を止め、賃金の高下を支配して事業の進歩を計りたりしあり、皆な特の外に失敗したりと云へども悉とく是れ彼の天理を服膺せんとしつるもの也。左るからに近世の東西諸國に現出したる政治界經濟界の現象を見れば、惣べて皆な此類の仁政に出でざりしは少なし、民間に人物多すぎて少しく平ならざる所ろあれば一風到來乍まち此を天上に吹上ぐ、此ゝに於てか調然として聲なし、政府に御用金不足し少しく平ならざる所ろあれば一波微動乍まち民の餘れるを打寄す、此ゝに於てか寂然として音なし、然れども民間にまた金の不足するとあればお上みは之に貸下金を下し玉へり、民間に事業の不足するとあればお上みは亦た自から之に着手し玉へり、此ゝに於てか民間の融通調和し事業燦爛たり、萬民鼓腹し家ごとに富饒たり、豈に是れ人手を以て需要供給を支配したるの惠に由るにあらずや。

此に於てか吾人謹しんで今の日本國社會の現況を察するに、「忠臣、貞女」の割合大ひに懸隔せんとするの兆あり、男女界の亂高下近きに起らんとするを見て恐惶にたへず、今に於て同胞の眠を醒まし疾聲大呼して其の注意を惹くは實に吾人が責任なりと信ず。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

史記に曰く忠臣は二君に仕へず、貞女は二夫を更へずと、至つて金言なり。之を以て蘇武は鼠を食つて匈奴に從わず、文天祥は四年囚へられて元に服せず、衞の宣夫人は我心石にあらず轉ばす可らず我心席に非ず卷く可らずと歌つて嫁せず、息君の夫人は殺ては室を異にし死しては穴を同ふせずと吟じて自殺したり。左れば此の金言昔し早く我日本にも船來し、開國二千年間常に日本人の節操を支配したり、此に於てか其の激する所ろは士らいの切腹となり奧方の自害となり、其穩やかなる處ろは隱君子と爲り尼と爲り、虛無僧と爲り後家とあれり。特に徳川幕府三百年の治世には此の道徳尤も嚴重となり、苟くも主人を見棄て丶外の主人に移る如き者あらば、好し一匹の犬猫にしても之を容赦せず、吾は嫉みの亭主なり、吾は妬みの主人あり、苟くも其心を二にせば亦た頭を二分すべしとの意氣込甚しかりき、左れば御家來も細君も敢て徳を二つにするとあかりし、君を更へ夫を更ゆる如きは實に犬猫にだも劣るの所行とは爲されたり。

然るに聖人は能く世と推し移ると云へり、故に金言も亦た世と共に推移せずんば聖たるとを得まじ、之を以て此語を解釋するもの近時に至つて大ひに面目を變へたり、云く、今や日本に二君あるなし故に二君に仕へざるを以て忠臣とするは惣てを忠臣とするに同じからん、經に云く人は二人の主に兼ね仕うる能はず即はち靈と俗と徳と不徳との二つに兼ね仕ふる能はずと、左れば今の二君に仕へずと云ふものは即はち之を二主義に仕へざるものと解すべし、例せば自由家にして壓制家となり、改進家にして保守家となり、民權家にして官權家となり、大同團結家にして藩閥家となるが如きとなかれと云ふに解すべき也。夫れ二君の解すでに如此し、故に二夫を釋くに於ても亦た少しく趣きを異にせざる可らず、此に於てか論者說を立て丶曰く、二夫を更へずとは一夫の妻にして他の男に適かざるを云ふ也、汝等、夫婦は一生の事たるを知らざる乎、夫もし死せば則はち寡婦たるも好し、寡婦にして再たび嫁つぐ宅も害なし、義人ワシントンの妻は寡婦にてありし、學士スチウワートミルの妻は寡婦にてありし、歐米文明國の道徳に於てすら寡婦の再緣を非とするものあらず、宗敎中尤も進步したるものに於てすら二度ぞひを非とするの敎あるを見ず、故に苟くも夫を失ない若くは至當の道理に由りて夫と離れたるの妻は則はち再び二夫に見ゆるを決して不可なし、左れば二夫を更へずとは一夫あるものにして第二夫に行かざ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

るを云ふ、聖人の教へ如此き姦を禁ずるの外かに敢て異論あるあしと云ふ也。

吾人之を考ふるに二つの解甚はだ當を得たり、故に今ま更めて此の兩解を簡約すれば、

舊論に於ては、

二人の主人に仕ふ可らず、二人の男に更るゝ可らず。

新論に於ては、

二箇の主義に仕ふ可らず、二人の男の妻と爲る可らず。

如此く云ふ也、吾人は新解釋の當を得たるとを信ず、故に讀者も亦た如此く解釋せられんとを要するや久し。然りと云へども、假りに此の新解釋未だ當を得るに至らずと爲し、矢張り之を舊解釋の如くに解すべしとならば、左らば二君の事も二夫の事も亦同樣に舊解釋に隨ふを可とす、凡そ道德は普通なるを要し、一に重きを課して他に輕きを責るを以て不道德の大根本となす、故に舊解釋の如くんば或る政黨の手下は常迄も其の黨總理の家來たるべし敢て二君に仕ふるの叛心ある可らず、左らば則はち妻も亦た再嫁するとなけん、然れども若し新解釋の如くんば或る政黨の總理も若し其主義を變ずれば斷然元の主義より離るべし敢て二主義に兼ね仕ふるの卑劣ある可らず、左らば則はち妻も亦た道理に隨つて夫と離緣しサッサ〳〵と二度嫁するものあるべく夫死せしのちは無論再嫁するとあるべし。嗟今や此の二解釋の路頭に立つ吾人其の何れかの一つに行かざる可らず、然るに一方には新しき酒を取て一方には舊き革袋を用ひんとす吾人はその大破裂を生ぜんとを憂ふるもの也、何んとなれば需要供給の天理は如此き勝手なる取扱ひを許さゞれば也。

新あらんと欲すれば之を新にせよ、舊ならんと欲すれば之を舊にせよ、新か舊か吾人は今に於て必らずしも爭論せじ、但だ此兩德の一つに併行せんとを希ふや實に切あり。然るに悲しい哉此の尤も尊とむべき金言は、啻に其の解釋の半々二樣に存在するのみならず、併せて其の一半は將に全く滅し去らんとする也。見よ、今の新論者は女子に再嫁を可とし、舊論者は尙ほ二男に更るゝを不可とせり、而して世上の婦女子の此の兩說に從ふや恰かも新舊の曆の共に贊成家を有するが如くなり、然れども彼の二君の說に至つては新舊の解ともに其の實行者を失ふに至る抑そも異常の現象にあらずや、見るべし、今や二君に仕ふるものもあり、而して亦た二主義に兼ね仕ふるもの尤も多し、切言するに今の男子は十中の九、二君

(新舊の)に仕ふるもの也、而して今の女子は十中の十、二夫(新舊の)に見へざるもの也。

左れば吾人は男女界之れより莫大の恐慌起らんとを恐るゝなれ、忠臣如此くに減じて貞女如此くに增加すれば、彼と此との需要供給を抑そも如何にせんや、利子を高下するも之を治るに足らず、賃金を制定するも之を防ぐに足らず、起業金を貸下るも之を整ふるに足らず、嗚呼物その平を得ざれば鳴る、故に男女界之よりして大ひに鳴らんとす、吾人抑そも之を何如にすべき、吾人抑そも之を何如にすべき。

先づ忠臣と貞女との割合如此くに相違すれば、之よりして貞女の獨居する者いよ／＼多くなるべし、左なきだに女の獨居者夥たゞしきに、もし如此くになり行かば抑そも之を何如にせん。又牡鷄鳴かずんば牝鷄晨たせざる可らず、男子に忠臣なくんば女は止むを得ず代つて忠臣たらざる可らず（其の殷鑑はクツの頁八にありクツ頁八の妻は即はち代つて家の男主人と爲る）故に之よりして女らしき女いよ／＼減じて止を得ず男らしき女を生ぜん、左なきだに女の公行を忌まるゝに、尙如此くになり行かば抑そも之を何如にせん。千思万考して吾人は其の治策を得ず、慟哭して才の短あるに慨げく、嗚呼女學先生抑そも之を何如んせん。

女友慰さめて曰く、先生請ふ落膽する勿れ、男子は不生産的の人にあらずや、其の存在は一代限りあれば頼母しさも少なければ亦恐ろしさも少なし、彼等が墮落變ふべしと云へども幸わいにして其の種を殘すとなけん、見よ女子は生産的の人なり、若し貞女多からば貞子いよ／＼增加すべし、貞子いよ／＼增加すれば日本も亦た安んずべきにあらずやと、即はち謳ふて云く、

數仭雲梯君慣レ攀。爭疑レ獨向ニ月宮一還上。蒼生備レ口應ニ齊鳴一。今日謝安易レ出レ山。

論說

○婦人の王國（其三）

平岩愃保述

何人にても功名心の無き者はない、家の中に閉ぢ籠もつて居るよりは、學校なり厚生舘なりで演說でもする時は、新聞にも名が出て世間に己れの名を知らるゝと云ふ處から一種の功名心が出て來る、男にも面白いとであるから女にも面白いに相違ない、故に誰も家の中に居つてホームを作るより演說でも仕度くあると云ふは免かるべからざるとでもありませうが、

夫れは餘り宜しくないと思ふ。私の見る處では此ホームと云へるとの方が社會や國と云ふより寧ろ大切の者と思ふ、ホームこそ社會國家の土臺で、社會國家よりも大切なりと云ふとを實地に示すとが貴孃方の任と思ひます、幸にして是迄と雖ども、婦人の働く塲所は則ち家と爲つて居る、此の狹少の様に思はれた家を高尙に淸潔にして、世間の人に國家社會の外に更に重要なる別天地あるを知らしむる様にするのが婦人の務むべき大切の事と思ふ。日本の婦人などは決して社會に出て働かねばならぬと云ふ必要が有りますまい、亞米利加婦人の様に家を治め様と思つても、家がないと云ふ譯なれば天から賜はつたる此の能力を風呂敷に包んで仕舞つて置くのは及ばん、充分社會に出て働くも宜しい、男子をして手を附けしめず、世間の人をして干渉せしめず、婦人自ら熱心に其事業に乘つ込んで働くが宜しい、夫れも又大なる効能はあるで御座りませう、併しながら私は日本の婦人は亞米利加婦人の様に家もなく良人もないと云ふ者はあるまいと思ふ、其譯は既に前に申したる如で、若し日本婦人をして一般に人に嫁する者とするなれば、私は政事社會に出て働くよりも家に在てホームを作るに働かるゝ方が餘程の効能が有ると思ふ。

子供が生れます時は何にも知らない、併し子供に考の種を第一に與へる者は誰で御座りませう、母です、子供の心に道德の念を始めて起さする者は誰か、愛の心を第一に起させる者は誰人であるかと云へば、母です、子供をして此の世の中に在る間は義務を盡さなければならん、高尙の心を持して居らなければならぬと敎ゆる者は誰か、母である、母と云ふ一字は餘程重く最も大なる言葉であります、又母と云ふ一字には種々の意味を含んで居る、母と云ふ一字には國も社會も含んで居る、何となれば此母の愛撫したる者が遂に國を成し、社會を成す者であるからです。シテ見れば其國の有様と云へるは母の意見如何に依て右にでも左にでも變ずる者で、多くの母が寄り集つて形ち造る處の者である、斯かる立派な務めあるをも捨てゝ、社會に出で而も公衆の前に立つて働く抔と申せば、止むを得ざる事情に迫られたるにあらずば、必ず大いなる量見違ひより來りたる過ちと思ひます。

夫れ故に婦人は先づ己れの地位を知らなければならぬ、其地位は更に賤しき者でない、男子と同様に而も並んで居ると考へて置かなければならん。其勢力と云ふ者は婦人の方が男子に比して餘程大なる者である、何んとなれば細かなるが故に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

大なるので、男子が國會に出て長い演說をして人を感動せしめ社會を利するとか、若しくは國の大難を救ふとかすれば、名譽は赫々として世間に響き渉り、新聞にも書物にも書き載せらるゝ、併し其勢力は一時の者に過ぎない、大層に目星しき勢力の樣であるが、併し左程に驚くべき大なる者ではない。之に反して婦人の勢力は最も廣くして且つ深き者である、何となれば每日々々時々刻々己れの子供に接し兄弟に接し朋友に接する時には、不知不識の間に其人の心に勢力を及ぼすので、其質極めて細かなるが故に確然と其人の氣性に密接く者である。今大きな蒸氣器械を拵へる其手際は實に立派の樣ではあるけれども、彼の時計を拵へたる者に於ては人が左程に褒めもしない、能く是を吟味して見れば其緻密なる事時計の方が却て立派で、蒸氣器械を拵へるよりも一層智力の働きが入用の樣に思ふ、併しながら世間の多くの人は時計を見ては未だ感服しないが、大きなる蒸氣器械を見ては仰天するケレども、其仰天する事は必ずしも重大なる事とは言はれない、未だ貴重の物なりとは言はれない。故に基督は汝等人に崇めらるゝ事を求むるなかれ崇め褒めらるゝ事は禍なりと言はれた、其譯は空しく尊敬せらるゝ樣になれば、多くは其目的事業を誤る樣になる、熱に浮かされた爲めに、頓でもない誤りを生ずるから基督は禍なりと仰せられた。

人は何れも眼に見ゆる處の物に依つて判斷する、併しながら神は人の氣の附かない處、眼に見へざる處の事に依ッて其價格を判斷する者である、故に婦人は社會の人に褒められずとも、又社會の人に大騷ぎせられざるとも、神に好まれる方が尊とい。故に私は貴孃方に申す、貴孃方は神の善しとせらるゝ處に就て熱心に御盡力なさい、（男子も其通りだが婦人方に申すのですから茲に特に斯く斷言するのです）故に貴孃方が世の中に出るにも其用意がなければならん、則ち自分の働くべき處を考へ、働くべき境界を自由にして世間の人に手を出させぬ樣、自分の城を堅固にし外の者に押領せらるゝ樣の事なく、自分の本城に居て決して汚辱を取る樣の事なく、勉めなければならんと思ふ。ホームこそ貴孃方の千古不易なる本城領分で御座る、而して家を齊へるに就き要用なる事柄は先輩も云ふてある、又世の中の人も論じて居る、定めて貴孃方も御承知で有りませうし、今私が是を演べるにも僅かの時間では迚も御咄し盡せませぬから、今皆樣の爲めになる事のうち最も卑近なるもの一二ヶ條を御咄し致して此演說を終

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

りませう。

先づ貴孃方が今日に於て未だ注意なさらん者がある、則ち第一に衣服の事、髪の事に注意が缺けて居りはせぬかと思ふ、イヤ御婦人方に於ては斯く申さずとも充分御注意なさるでは御座りませう、併し學問でもなさる方の心の中には外貌を飾る人は恰度彼の蝶々の様であると思ふて有ませう。蝶は身體は美くしく愛らしく飛び周ぐッて居る者ではあるが、少しも此の世を益する様の事はない、學問でもする婦人は此の蝶の様に身體計り美しくしても仕方がないと思はるゝので有りませう、併し私も其の説には幾分か同意をするけれども全く同意する事は出來ない。私は却て充分に心を外貌に用ゆるが善いと思ふ、胡蝶の様に奇麗にあるが善いと思ふ、胡蝶に劣らぬ様注意なさるが宜しいと思ふ、貴孃方考へて御覽なさい胡蝶は誰が拵へたのか彼の美しき花は誰れが拵へましたか、人々の心には美しき者を觀ては是を愛するの心が起る、彼の花は決して惡魔の造りたる者ではない、則ち吾を造りたる神と同様なる神の造りたる者である、ソコデ天程美を尙ぶ者はないと云ふ事が知れます、皆様方も彼の花を御眞似なさい、又彼の胡蝶を御眞似なさるが宜しいと思ふ、衣服の事に就ても顔の事に就ても充分心を用い胡蝶に劣らぬ様に心掛るが宜しい。併しながら世間の人が胡蝶を攻撃する所以の者は、容貌の事計りに走ッて大切なる務をせぬから擯斥するので御座りませう、人間は彼の禽獸や胡蝶の如き者ではなく、内に靈魂を具へ道德心を有して居る者だから、夫だけに責任も重き者であるに胡蝶の如く容貌計りを飾ッた處が仕方がないと云ふので御座りませう、成程右の如くに己れの本を養はずして外貌計りを飾ッては如何にも惡るいで御座ります、私の申すのは心をも脩め德をも養ひ、亦た衣服も飾るべし、髪も飾るべし、只心を重んずるが故に衣服や顔容貌は遐々として居ッても宜しいと云ふては徃けないと云ふので、私は兩方を御務めなさいと御勸め申す。併し兩方は出來ないと云ふ人があるかも知れんが、若し出來んなれば人間にならぬ方が宜しい、人間は此の二ッを爲すの務めがあるので、中を養ひ外を美麗にするは人間の本分である、凡ての事に婦人方は心を用ゆるが宜しい。是に就て私は皆様方に申す、少し此の點は西洋婦人を御學びなさい、西洋の婦人は誠に粧り方に巧みて有る、日本の婦人は粧方が或は拙ではないかと思ひます、成程西洋の婦人は富有で有るから如何なる立派な事も出來ませうと云

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ふかも知れんが、金持は措いて兎に角普通の人普通の婦人は、西洋とても左程立派な衣物斗り着て居る者ではない、只だ同じ衣物を着るにも觀榮の宜しい樣に粧る事です。それは如何なる事かと申ふすと、色合の調合を善くする事で、西洋婦人は能く此の調合法を知ッて居る、自分の顔に相當する色合の衣物を着るので、白に桃色は映りが好いとか云ふ樣に、彩色方を巧みにする、然るに日本の婦人は男子の眼より見ても甚だ不適當の處がある、只赤くさへあれば立派だと思ひ、紫でさへあれば高尚だと思ふ樣な者で、自分の容貌自分の顔の色自分の年恰好をも顧みず、全くは半纏や下着の色の取り合はせ工合を知らないのです、處が西洋婦人に於ては是が一種の學問の樣に成ッて居るから、又熱心に是を研究して居る者がある、何うせ同じ衣物を着るなれば、何うせ同じ金を持ッて往ッて買うなれば、其人の風に適するが能い。天の使は何時でも美しく書いてある、故に私は何も衣服に澤山の金を掛けろと申すのでハ無い、只婦人方に對して衣服の飾り工合に御注意なさいと申す迄です、田舍から出て來た者を御覽なさい白粉をベタ／＼と黒顔に眞つ白に塗るから、其顔付ハ實に申し樣もない有樣です、此れ全く雅味がないからです。故に皆樣方の學校などに於てハ、少し油繪を御學びになるが宜しからうと思ひます、油繪は色の調合などに工夫を凝らすものてすから、自然に色の配合方を覺へ、調色上風雅な趣味を生じ、同じ價の衣物を着るにも其人に適當し、高尚で、優美で、而も立派に見ゆる衣服を纏ふとが出來るでありませう、又家内の裝飾をするにも、色の調合に依て、巧に雅致快樂を示すとも出來ませう。（未完）

批評

○日本青年精神的之教育　立志之礎

冷々紛々たる万卷の近著中、吾人は今ま尤も喜こびて讀了したる一卷を評す、之を松村介石君の著「立志之礎」と爲す。嗚呼明治の青年は極めて憂ふべき人物なれ、其の細巧なるものはあり、其の利口なるものはあり、其の輕薄辨佞なるものはあり、或は暴りに慷慨するもの學なくして壯論するもの精念せずして暴進するものはあり、未だ彼の眞摯にして道を踏み、剛强にして文を兼ね、神を畏れて義務を重ずる眞活潑の青年あるを見ると少なし、而して如此き青年を教育する教師すら實に僅少にして、如此き意見を論じたる書籍すら乏しかりし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に、今に於て忽まち此書を得たり、吾人は明治の男女青年の爲に切に之を賀す。大凡そ立志論の中先づ西國立志篇を讀たるものは又た之を讀むべし、必らず大に學ぶ所ろあらん。精神大に宜ろし、論題殆んど備はれり、文章亦た極めて重快なり、然れども間ま不穩當の語句あり特に初一二篇に於て其の尤も多きは蓋し著者が病中の作たるゆへ也、吾人之を惜しむと共に亦之を辨ぜざる可らず。然れども本書の如きは是れ自から廣告するものあり、讀者須らく細密に公平に之を玩讀すべし。

吾人は茲にたゞ一事を告ぐ、凡そ本書を讀みて先づ正當に其の益を受んと欲せば、先づ「書籍と万有との感化」篇中二百八頁以下を見るべし、云く、

余輩不幸にして今日迄未だ仰ぎ望むの人物に遇はず、然れども只だ一つの仰ぎ望むべきものあるに遇へり、富嶽是れなり、其萬山を蹈んで雲漢に聳へ、白冠を被りて宇内に潔立するを望みしときには、實に我人物の轉た高尙に感化せられしとを覺へしぞや、余輩又不幸にして未だ剛柔相和し、勇愛相伴ふ英語の所謂る(Noble)なる人物に遇はず、然れども幸にして、惟りチヤリ子の獅子に遇へり、夫れ彼の獅子たる、其眠るに當ては、恰も赤子の眠るが如く、其戯るゝに當ては、恰も兒童の戯るゝに似たり、然れども一旦奮然として起つに當ては、目光瞳々威風凜々、聲天地に響き、勢山嶽を崩す、余熟々チヤリ子の獅子を觀、實に非常なる感化を蒙りたり、今にして之を思ふに猶ほ爽然たるの心地するなり、然れば吾人は失望すべからず、縱令ひ人間に吾人の師友たる人物の乏しきにもせよ、萬有には吾人の師友たる人物の乏しきにもせよ、又現世に吾人の師友夥多あるなり、到るところに師友あるなり、吾人若夫れ齪々として塵世の小事に究するとありとせむか、天を見るべし杳々蒼々として際限なく、地球を視ると小豆を視るが如く人間を觀ると昆虫を視るが如く、雲は躍り、風は荒れ、海は吼へ、山は鳴るとも殆んど知らざるものゝ如し、何ぞ其の度量の濶大なるぞや、斯くて又天象を覩ふべし、彼の千万億數の星宿も各々一大世界にあらずや而して其の一大世界恰も螢火に異ならず、吾人は抑々何物ぞや、高帽高く聳ゆるとも一尺に滿たず、車馬能く馳するとも十里に過ぎす而して一尺の高、十里の長、之を宇内の宏濶に比すれば抑抑夫れ幾何ぞや、嗟呼嗚呼蜉蝣々々人生は宇内の蜉蝣なり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

其大と云ひ小と云ひ貴と云ひ賤と云ふも畢竟蜉蝣界中の稱號のみ又何ぞ齷齪として人生の小事に區々たらんやと豁然として豈また悟るところなからんや。

古人謂はずや書を讀む山に遊ぶに如かずと、斷崖峭壁に登りては乃ち豪邁の氣象を養ひ、晦林幽谷に降りては乃ち慷慨の心情を燃し、巉峻絶嶽を望みては乃ち曰く我れ當に之を攀づべし、蓁莽荊棘に出會ふては乃ち曰く我れ當に之を排くべしと、斯て溪を渡り、坂を越へ、雲に嘯き、峯に吟じ、而して自由に登遊せよ、人物を養成するの師友到る所に非るはなきなり、記臆せよ、陽明は山水の間に同志を點化し、司馬遷は山川を跋渉して雄壯奇抜の文を作せり、又何ぞ人間に師友の乏しきを患へんや。

而して吾人は著者に請ひ、「精神」の篇中左の一段を玆に掲載す、嗚呼著者は私に於ては吾人が愛友なり、故に吾人が此書の爲に辨ずるを異なりとする者もあらん、然れども吾人は先づ此書に敬服し、亦少さか今の時勢を思ふあるが故に、敢て誠實に如此く爲さゞるを得ざる也。

夕陽西に沒せんとして天色漸く昏く、微光山野を掠めて暮鴉塒にいそぐ、時に一個の青年あり"Excelsior"（進達の意）と大書したる一流の旗を押し立てつゝアルプス山下の一村を出で、氷雲を蹈み寒風を犯して來る、父老之を見て袂を扣へて止めて曰く青年よ行くと勿れ、暴風天に舞ひ壑潭怒號す、岌々乎たり危哉、須らく父老と共に一夜を明かせよ、青年袂を拂ひ只だ進達を高吟して去る、少婦之を見て呼はつて曰く青年よ止り給へ、日は暮れて道暗し冀くは此方に憩ひ玉へよ、青年顧みて涙を濺せり、然れども猶進達を吟じて去る、農夫之を見て皆諸共に叫で曰青年よ、心せよ崩雪壓下し枯木摧落せん、青年聞て頷くのみ猶進達を吟じて往、暴風益々暴に、亂雪面を打ち、積雪脛を沒す、青年大息す、然れども一歩も踵を廻さず、只だ進達々々と大喝連呼山を蹴て上る、何ぞ其精神の猛烈なるぞや、然り是れ青年の精神なり、否、青年の精神たらざるべからざるなり。（ロングフエローの詩意を述ぶ）。

凡そ世界の大事業は皆精神より產出せり、而して其精神は時運時勢に順ひたる精神にはあらずして多くは皆時運に逆ひ時勢に反したる一個一人の精神に由るもの多し、以レ此益益其精神の精神たる價値を知る、先づコロンブスを思へ、身一水夫にありながら其精神既に全世界を幷呑したりし、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

彼れは既に世界の圓形を眞理と信じ既に之を周航せんとを決したりし（決心）、當時世人の懼れたる大海の怪物は物の數かは、逆浪怒濤は物の數かは、貧困は物の數かは、惡評は物の數かは、放逐は物の數かは、而て乞食は物の數かは、其精神は九天を拔き、其一念は地軸を貫きたり、於此乎始て新世界の造物主となれり、若夫れコロンブスの精神微らんか、たとひ千百のガリレオ起り、万百のケプレル出で、善く其學說を辨明するとも、世界の圓形は猶ほ其想像にすぎざりしあるべし、又かのウールバルフオスを思へ、万敗屈せず千挫撓まず、凡そ數十回の敗績を取りしと雖も、屹然として風雨の中に巋立し、擊たるゝとも衝かるゝとも、呼ぶものあるとも叫ぶ者あるとも、更に之を物ともせず、義旗を捧げ健脚を固め、奴隸廢止を高唱し孤劍荊棘を排て上り、而て塗炭界の救主となりたり、又た顧みて女丈夫を視よ、先づナイチンゲールを視よ、彼れ十三歲にして既に病者の難澁を憐れみ、心私に誓て曰く余は生涯身を病者の爲めに盡すべしと（決心）、於此乎直徑貫進爾來見るもの聞くもの思ふもの夢るもの悉く病者の上にあらざるなく、クリミヤの大戰起るに及んで、政府彼を召す、彼れ感激應へて曰く此身既に病者に委せり、天涯万里の客となるとも、彈丸雨中に暴露するとも、虎拉刺疫病の巢に伏すとも、若や病者の爲としきかば何ぞ辭退を申すべきやと、即日拜命して歸り、日ならず結束して旅す、隣國之を聞て泣き、沿道彼を迎へて歡ぶ、宿主爲めに價を云はず、志士金を聚めて贐す、於此乎其德四方に薰發せり、嗚呼此の精神を視、又此德を思へ、後日看病世界の女王となるも豈亦た偶然の事ならんや、斯て又禁酒會頭ウイラード女を云はんか、彼れは今日世界第一の女傑と知らる、然れども其初を尋ぬるときには、種々の悲風に伏して後今日の炎々を致したるなり、彼れ或大學の校長たりし、一日禁酒會の擧をきゝ心大に感ずるところあり、行て其狀を問ふ、衆女答へて曰く女生等未だ微力にして會員未だ多からず、さりながら天に依て企るところは無情酔亂の此世界をして淸潔平和の世界たらしめんとするにあり、姉幸に來りて扶け玉はずやと、ウイラード諾して歸る（決心）、於此乎直に校長を辭し、專ら該會の爲に盡さんとを期せり、然れども貯蓄ある身にあらざれば日に月に窮迫せり、一日母公彼に說て曰く娘校長を辭して禁酒會に盡す誠に嘉みすべきとながらも、斯て此儘

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

あらんには、母子の衣食を如何にせん、少しく思ひ返し玉へよ、ウイラード答へて曰く兒既に此身を斯會に與へたり復兒が自由の身に侍べらず、若夫れ衣食に至りては、天父の照覽はし玉ふあれば、凍餓するとはヨモはべらじ、供に信仰第一にこそと、母公聞て復た云はず、程經て窮迫ますく甚し、偶々ウイラード病にかゝる、時に赤貧洗ふが如く、藥餌を購ふ資さへなし、母公孃を顧みて曰く孃には醫士は無用なるべし、將た又藥餌は用ひ玉はじ、孃の信仰強ければなりと、乃ち少しく涙ぐみ、肅然として一室に去る、孃病床に在り之を聞て胸裂るが如く伏して神に祈て曰く嗟乎余に勇氣を與へ玉へと、乃ち一封を會員に送りて以て其狀を述ぶ（是れウイラードが已が辛苦を白狀せし始にして又其終なるべし）、されば會員は之を見て大に驚き急に有志を募り、孃をして內顧の憂無らしめたり、於此乎孃の精神は遂に天下を提げて萬國禁酒會の大統領たらしむるに至りたり、嗚呼諸君よ此等の精神を觀よ、コロンブスと云ひウイラードと云ひ單だそれ一個一人なり、其丈高さも一丈より高かゝらざるべく、其舌長きも五寸より長からざるべし、然れども彼等の精神は天地に跼蹐し、萬世に影響し、社會の全膽を脹發せしめたり、輿論は彼等を逆待せり、時勢は彼等に逆吹せり、然れども彼等の精神は怒濤を衝き天霧を排し、遂に其風潮を征服せしめたりし、諺に曰く周圍は人を造ると、然れども余輩は曰く精神は周圍を造ると、何となれば凡そ輿論時勢なるものも多くは一個少數の精神決意より出るものなるとを視ればなり。

余今寒燈に對して此文を草す、偶々按摩傍にあり、母公の肩を摩す、雜談飛出輕辨能く轉ず、時に彼れ肅然として語を更めて曰くア、世にも殊勝なる人こそ候へ、鄙宅固より矮陋にして客を留るに堪へざれども、此比十七八歲の書生公あり、鄙宅の二階を借せよと云はる、因て約して之を借せしに彼方來りしのち更に食する樣子を見ず、愚妻大に之を怪しみ一日機を得て之を尋ねければ彼れ時に微笑しながら「我れ貧にして米食すると能はず、只だ一片の麪包を得て日々に我饑を凌ぐのみ、之を見よ（時に瘦骨を撫して）我腕を見よ、既に久しく枯槁せり、然れども媼よ此に枯槁せざるものあり我精神即ち是なりと云ひすてゝ更に屈する色を見せず、日々某校に通學して元氣益々熾んなり、何と殊勝に候はずやと、余時に一休して竊に之を聽居たりしかば

件想忽ち余をして十年以前に歸へらしめたり然り十年以前の一昔に於ては、余も亦た同境に陷りたりし、一碗の麵包、一掬の水是れ我が一回の糊口なりし、憐憫を人に乞はんか、我頑骨は之を好まず、故山に歸へりて豐滿せんか、我れ立志して出で來れり、何の面目ありて再び踵を迴さんや、アヽ〳〵死せば死せよ、徑々碌々として辱生せんよりは、寧ろ精神凜として以て死するの餘榮あるに如かずと、覺悟は既に定めたり、然れども肉落ち骨出で面目黧黑手足胼胝、數町漸く步して、道路に僵倒するあるに至りては、殆ど精神消耗して、呆然卑屈の逃路を望みしと亦往々にしてこれありたりし、然れば余輩今此談を聞く豈相憐の情なからんや、嗚呼進めよや精神の兄弟、君が淋漓たる精神は既に按摩をさへ驚嘆せしめたり、余輩も亦た既に之を聞て昔日を追懷し、感嘆無極紅淚不覺迸出せり、天下君を聞くもの亦た必ず奮起して以て君に從はんとを願ふべし、彼れ既に君を知る、余れ既に君を知る、而して天下又將に君を知るものあらんとす、願くは余輩が嘗て望みし如く、逃路の方を望むと勿れ、余輩嘗て思ひし如く、天下我を知るものなしと思ふと勿れ、死を決して進むべし、救船必ず近きに在るべし。

(89)。貴婦人會話篇　洋字小本一册九十頁定價三十五錢　發兌所東京南傳馬町辻本尙春堂

此書は英國ベン井ル女史が、特に我國の女流會話用の爲に著わされたるものヽ由にて、英語と羅馬字とを以て普通の話題十八章に付きて敎示したり。簡畧にして語路も略ぼ調ひたり、但だ印刷上の誤まりと見ゆるものヽ少なからぬぞ殘念なれ。例へば。第二頁 Come (Comes) 第三頁 took (look) の類、又第六頁 Storonger 第七頁 for gotten の類、もしくは will difference (—Make no difference) の類少なからず。然し日本人の手に成りしものと違ひ大ひに見るべき所ろ多し。

叢話

○棄婦行　（村山佛山作）　玆月居士

倘有新月眉。倘有白雪肌。怪來同穴契。忽爲生別離。君心可黄又可黑。百年使妾泣練絲。只願留妾連理帶。裂爲良人履頭綦。妾身分一死。胎中奈有子。珍重應鞠養。定與君顏似。縱得掌上珠。靡父又何怙。涕零如雨將上車。梨花無力有誰扶。倘是良人所手寫。十載懷來離婚書。

忍月曰。姤風昨年闌春の花を摧くも猶ほ今春の爛熳あり、姝雲今宵中秋の月を蔽ふも猶ほ明月の嬋妍あり、獨り離婚に至つては恩情中絶の關鎖、生別にして兼て死別たり、嗚呼婦となつて誰か偕老を期せざらんや、而して此婦は一朝所天に棄てられ、上に頼る可きの親なく、下に歸るべきの家なし、既往の愛情暖めんと欲して暖むるに由なく、空しく昔日を追想して愁涙孤寂の間に老朽せんのみ、予之を讀んで覺へず靑衫淋漓たり、方今何ぞ反目者の多きや、舊を棄て新を愛し、朝に紅白を出し夕に濃淡を入る、人の大倫何くに存す、語を寄す江湖幾多の輕薄郎、糟糠の妻をして秋扇を歎ぜしむる勿れ。

○結婚せざるべからざる乎

陸前古川　藤田雲湖女史

余ハ斷言す人間ハ必らず婚姻せざるべからず好し或ハ婚姻し能ハざるものあるべしと云さも必らずや婚姻せざるべからざる義務を有せりと何となれば吾人々類の身躰八萬千皮一髮も未た曾て無用の長物を存せざるを知れハ也否造物者の奇工宇宙圓滿する處の森羅萬物一として其贅物なきを信すれば也若し其れ記者の論する如く人ハ婚姻するが爲に生るにあらず生て而して職を發達し事業を相助け幸福を遺傳し公私を利し以て渾然圓滿の大平世界を造り出さんが爲に婚姻するものとせば婚姻の事たる豈人世の最大至要にして且つ最大幸福なる事にあらずや蓋し男女兩性の特殊なる器具ハ之か需用に由て造化の造り出されたるものなるハ素より疑を容るべからず然らハ即ち人間の婚姻せざるハ是れ天の賜を受けざるにあらずや是れ天意に逆ふものにあらずや婚姻の事豈人々の擧て負擔すべき責任なしとせんや其男女の不平均にして鳩の如く鶺鴒の如くならざるハ恐らくハ一種不明の原因によりて人類の天に悖るの結果として現出せるにあらざるなきか天人に病を降さず其攝生を過るに由て病あり天人に災を與へず其惡をなすに依て災あり男女の不平均其醜行汚爲の原因するものにあらざるを保せんや然れさも余ハ大胆に其理由を極めたりと云ハず若し然りとするを得ハ男女の不平均ハ其不完全汚濁の世にありてのみ早晩人天に服し分毫も天意に逆ふの人なく人に必らず病なく人に必らず汚行なく天眞爛熳の時に至らば或ハ又男女の同數ならんこさ期し難にあらざるべし記者ハ此時に於ても尚婚姻の事豈人々の擧て負擔すべき責任ならんやさ云ふか余ハ假令此時に至るも其婚姻を好まざる人に向て强て婚姻せしむるを得ざるべし然れども汝等必らず婚姻すべし婚姻せざるべからずと云ふを得べし只今日にありて其婚姻せざるべからざるの義務を認識すと雖とも其相手たるべき一方にかて欠乏を生するが故に其婚姻せざるものを以て直に不徳なり世捨人なりと言ふを得ざるなり況んや某學士の所謂變性女子變性男子と云ふが如きに至てハ余ハ殆と絕奇絕妙絕怪絕訝に堪へず呆然口を開て自失するもの之を久しふせり試みに問ハん何故に婚姻せざる女子ハ變生して男子となることを得るか思ふに婚姻せざるも女子ハ女子たることを失ハざるべし又婚姻せざるも到底男子の特徵たるべき諸因を得ること能ハざるべし然らハ變生男子は依然舊來の女子にして而して婚姻せざるの故を以て男子となれるものなるか是れ果して男子と（假令變生の二字を冠するも）言ふことを得べきか奇も又奇ならずや更に問ハん君か眼中にハ何故に母妻ありて女子なきか母妻ハ是れ女子にあらざるか思ふに幾數十億の人間未た曾て一人も男女以外のものあらざるべし人間とハ即ち男女の概稱にあらずや其母妻たり父夫たるも豈人間たるを妨くるものならんや豈男女たるを失ふものならんや君か眼中果して母妻ありて女子なからんか父夫ありて男子なからんか古來男女たらざる人間の存せることなければハ即ち君か眼中人間なき也嗚呼高説の如くんハ滔々たる天下人間たるもの只僅に奇妙なる變生男子さ變性女子あるのみ母妻父夫果して男女子にあらずとせば即ち人間にあらずとせハ婚姻の事實に忌むべく畏るべきものにあらずや婚姻ハ之を行ひたるもの旣に人間たらず之を行ハざるもの女子ハ變して男子となり男子ハ變して女子となる吁婚姻ハ第二の造物者なる哉而して婚姻をして第二の造物者たらしむるもの獨り君あるのみ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○わかざくら　　　　默　夢

花間にもるゝ月の影、空にたれたる櫻の糸、春のなかばといひながら、夜寒の風さへ渡り、匂ひそめにし花の香も、こよいを限り散るぞよと、思へばかなし若櫻」かゝる眺めもよそに見そ、ひとり思案に呉れ竹の、ふるき机に身をよする、としまだ若き乙女子は、よすがもよゝと泣く計り、うきにたへぬは我が身のみ」ゆひもほどへぬ今様の、束ねの髪を打ちみだし、薔薇の花もゝみくだき、おつる雫を袖にうけ、頬のほとりをなきはらし、紅そむる袖をかみ、わが身のものと知りつゝも、女子心のやるせなさ」汲みて見まほし山の井の、そこの心を露だにも。草葉のかげにやどるゝ、雙の親だにながらへば、かゝるうき目は見ざらまし、かほとかたちのみにくさを、口わしざまに言ひはやされ、まなびのみちにいとうとき、友垣どもに笑はるゝ、これもたれゆえわがみゆえ、やう〳〵心とりなほし、靜にしとねに入りぬれば、あと見送れる月の影」のこりの夢のさめぬ間に、白みきたりし夜はあけて、はるかにひゞくかねの音は、しようじつなりとつたへける、いでやをしへをきかんとて、あわからめやと薄化粧、人目のせきもあるなれば、鄙よりこせし一と重ね、賤が女だにもわろうべき、衣をとりだしみづくろひ、てもとまたもやむせび泣き」かゝるとをば露しらぬ、友垣どもはとり〴〵に、御堂へ行けば束のまも、こうしのかたをば見ぬことよ、人目の關もはゞからで、思ひのなみをうちよする、いわのなりぞはをそろしや、さなぎだにをそきけしようの、このごろは、ひまとることもことはりぞ、水瀬に浮む學び草、かゝることのみいゝはやす、心の根こそ果敢なけれ」人はいざ心ろひとつに袖のまへ、ながの年月おひみざる、ひとりの兄のありかをば、つげたまひねとひたすらに、念じわするゝひまもなし。あたりに笑ふ友がきは、我が思ひをばとげさせよとて、またもや祈念をはじめけると、あざり合るも知らざらん、まなびの宿の女郎花、しげれる中のかず〳〵は、かるき心もゝちぬべし、同じ園面にさき出る、若きをばなのしなさだめ。御堂をおへてかへり行く、遠くもあらぬみちすがら、尾花がうちへ打ち交じ、袖ふりたへてたわむるゝ、あわれますほの花の色」日はしづ〳〵と山の端に、はや沈み行く夕暮の、殘りの霞うちやかれ、遠き鳥だに影もなく、色なき月にてるものは、かねにをどろく春衣。さきの乙女の暮かけて、をやのはかばに詣んと、落花をふんでいで行けり」かくとばかりに置く石の

墓は木の葉のふりうづみ、言問ふものはさくら花、さきし乙女のねんごろに、とうらひてのち眺むれば、かたへの墓の夕影に、身を忍ばせし男あり」雲間を出し月色に、互に見合す面影は、定かならねど慕ひてし、忘れもなさぬ兄と妹、二人は互に手をとりて、しばしはくるゝ喜に、ものも言はれぬ涙川。

○旅のはぢ　（二）　　むらさき戯稿

人はさま〴〵デス。一寸と拝顔しても叱られそふに思はるゝ先生。腹の立つのを奥歯で噛みしめ、飲み込んで胸へ納める教師。僅かの事に大喝一聲机をたゝひて怒る教師。生徒にシッペイがへしを頂戴する教師。何にしても生徒には閻魔樣に見へ金棒持た鬼と思はれるかも知れません。しかし閻魔樣では決して子弟の發達を進むる事は出來ずさりとて平常地藏顏でも其天才を伸ばす事は出來ません。アーそうして見ると六づかしひ者デス‥‥教師の務めは。

生徒‥‥生徒の中にもいろ〳〵の種類があり。百人よれば百色で、甘々と教師の前を誤魔化す生徒。硯の出ない口を開いて矢鱈に悪口を云ふ生徒。點數の多少席順の高低に不平を唱へる生徒の黨派を組織して總理を氣取る生徒の教師の穴を討折て見付る生徒‥‥悪口の方はモーたくさんデス。しかしまた一心不亂に學事をつとむるの生徒。幼きものをいたはり弱き者を輔くる生徒。影になり日なたになりて朋友に信義をつくす生徒。正實に自らを愛し、長上を尊び、校事に配慮し、靜肅に、優美に、勤勞にすべて人に喜ばれ敬まはれ、慕はれ、愛せらるゝの生徒も多いようデス。實にこれ等は鬼薊の内にあるすみれ、藪枯しの内にある春蘭デス。

終業時間の鐘の響き渡るや否や、籠の鳥とも思はるゝ女生徒は雲井に羽を延す心地にて運動場へ一齊に飛出しマシタ、ある者はスウィングを試み、またある者はテニス、クロッケー、と己が得意の遊戲を試みて、笑ふものもありいかるものもあり、倒るゝ者あり走る者あり。喜び遊ぶその樣は遊で居る當人よりも、妙なものデ遙かまさつてうれしいのは‥‥

プロクトルの詩集を手にし。他の生徒には目もかけず

"Be strong to hope O heart! Though day is bright;
Can star only shine, In the dark night.

と口のうちにて讀み終り何となく不穩の面色デス。顔にはたしかに顯れます‥‥心のうちに在る幽欝の情が。やがて傍の松が根に腰うちかけてホット長大息を吐ひて‥‥マタ眼を

擧げて四方を見廻し。氣を取りなほしたようデスが‥‥その時計が悲壯の顔色‥‥暫らくして後は又例の長大息デス、アー私の望が足りないのかしらん。こ暗き夜にこそ星は輝るこツーダ私の今の有樣は暗いのダカラ、亦輝る星の光りも強かる可き筈だ。何にしても幽欝と云ふ情は女流の持前かとも思われるが‥‥音樂も‥‥朋友も‥‥自然も‥況んや古人が架空の學說などは決して我心を慰むものデナイツマリ自然の光景をありのまゝに寫し得たもの‥‥その寫し得た最も微細なるの詩句はドーカと思へばまた我心を‥‥

何の源因で心を苦め。何でそのように思を惱ますノカ分りません。分たつたら慰める仕方もあろうに。沈思默考トデモ云ふんデスか下をうつむいて無言デス‥‥見マシタ半襟のあたりに水の一滴‥‥サテは淚か‥‥何故の

たのしげに笑ふ聲のうちより走り來る、笑の一分子。ト見れば一人のあいらしき娘デス‥‥前回に出た。」やがて以前の女生徒が傍へ走り來り、

お時サン‥‥お時サン、ドーナスッタノ‥‥エ、御心持が惡いのデスカ。エ‥‥お時サン‥‥氣分が‥‥河田サン‥‥

イーエ、ドーモシナイノ、

ふしぎです此お時孃、五月蠅尋ぬる小女の語を何トモ思わないようデス、軈て頭を擡げてはじめてニコ〳〵と笑顔を形造りました、

お時サン‥‥面白かつたのコ、吉村サンがね‥‥

ドーナスッたの、

山岡サンの御部屋デ御茶坊主をしてイヤト云ふほど頭を打タノ‥‥モー可笑くつて〳〵‥‥

罪がありません‥‥何も人の苦しみを愉快に思ふと云ふのではないのですもの‥‥唯つまらぬ事が可笑しいのは小供心にある情デス、お時も思わず其笑につりこまれマシタ、

アラマー御氣毒ね‥‥あなた昨日御家へ御歸りなすつたつて。御つかさんが定めしおよろこびでしたろう、

エー、うちへ歸る前は大層樂しく、早く歸りたくつてたまりませんが、家へ歸るとイロ〳〵な事を叱られるもんだから亦學校へ歸り度なるの、昨日も裁縫の事や何かデ大へん叱られました‥‥デスが御かさんがアンナニ心配すると氣の毒デ‥私は一ばん母に心配させるのがイヤヨ、

耳底に響く一發の砲聲とも聞へました‥‥小女の此の語が

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

しばしわすれし故鄕の母の事、いつくしみの情ふかき祖母の事、見れば小女の顏が忘れもせぬ妹の顏に似て來ました、憐れ又淚のつゝみが涌き出づる思の爲めにくづれそうデス。

佳傳

(本號餘白乏しく此の欄を省く)

小說

○理想の紳士

月の舍しのぶ

第九回　主人に承知せらるゝは

此夜出水いよ〳〵增し、汎濫として將に能登市場の製造所を浸さんとしたれば、裵は先づ之に心付きて知らせにとて來りしなり。余が喜びの餘り起き出でゝ話さんとするを制し止め、早くも父に隨ひて出で行きたり、一顧再顧いと殘念らしく言葉を殘して出で行きたり。

紀元一千七百九十五年二月五日、數日前來の洪水ます〳〵漲りて田地人家を押し流せりとは今に至る迄近世史にあり〳〵と記し置かるゝとなるが、思ひ出せば其夜は實に恐ろしき水害ありし。橋は落ち、舟は摧け、家は流され、人畜の死せしもの亦少なからず、但だ幸わひに此邊のみは左程に甚はだしき害を蒙むるとなかりしとは云へ、餘流押し登して災わひを持ち來りたると固より少なからず。

父と裵とが出で行かれしのち、余は復たび眠るべくもあらず、たゞ伏床の中に苦吟してありしに、一時の時計は知らぬ間に鳴りて早や二時の鐘を聞きぬ、夫より亦徒らに過ぎて最早三時となりぬ、三時も又匆々として過ぎ、早くも曉た近くなりぬ、待ち勞れて思はずトロ〳〵とするとき枕上に父の聲。

チ、お父さま、

思はず飛び起きて握手し、いよ〳〵固たく握手し、從來嘗て爲しとなき程に久しく握手したるに、嚴格なる父は此時亦た常になく穩やかにて、其の軟らかき氣色、溫和なる言葉附は二つながらわが父に於て決して見しとあらざりし程なりき。

お父さま、製造所は何如かなりましたか。

ナニ別にどうもあらんが、惣べてを與へ玉ひたる御神は亦た惣べてを取去り玉ふた、文太郎、わしはもう多くの貧人と同樣の貧人になつたよ。

言ひつゝドッカと座られたり、吾家の財産は父が非常の辛苦にて得られしものゆへ、父が之を惜しみ玉ふとも亦た一層なり、然るに今は斯く迄に沈着して其大損害を忍ばるゝと反つ

て異様に見ゆる程なりし。

お父さま御心配なさいますなよ、まだ〳〵不幸に會つた人がありませうから。

そうだとも、實にそうだ、なか〳〵まだ非道い損害を受けるのであつたよ、もしあの襄が居……ヲイ襄は何處へ行つた……ナニ外に居る、コレ内へ這入れ。

襄は入り來れり、衣服は水に濕り冷たさうに見へたり、余は愉快に之を招きてストーブの傍に寄らしめ、父と襄との仲に立ちて左右を見るに、襄は壯んなる顔附、父は極めて穩やかなり、余はます〳〵愉快にて安心したり。

勢よ、

父は呼び玉へり、

已と、襄とに御膳を用意してくれ、働らき詰たので非常にひもじくあつた。

早速に持來りたるが、コップ一つ皿一つ麵包一つ、蓋しれい一人の膳なるべし、

ヲイ、モウ一つ。

父は鋭どく命じ玉へり、思はず余は勢を見詰めたり、

襄のは臺所ろに用意しました、あちらへ行つたら宜しう御座いましやう。

父はギョットせられたり、元來此のお勢には父も時々辟易し玉いしあり、左れど父は驚ろきと怒りとを靜かに治め、

勢、言ふ通りにお仕、モ一つ茲へ持つて來てくれ。

勢の大立腹にまで、而して余の大いある喜こびに迄、襄は父と相對し、而も父の異常なる寬容を崇むりつゝ、食事したり、余が喜こび幾千なりしぞ讀者宜しく推し玉ふべし。

食事も畢り、朝日の未だ高からねば、父は尙ほストーブに當りながら余に當夜の有様を精はしく話しきかされて、且つ襄が大ひに盡力したるとを告げられぬ。

ソレジヤア、襄は大層に働らいたのですネー。

よく働らいてくれた、實に若い躰だに大人の頭まを附けたやうで、迚も少年とは思はれん。

襄は極めて愉快に感じたる樣ありしが、否ゝ襄よりも多く余は先づ出世したる心地したる。然し父は其儘暫時默せしのち突然問かけて、

襄、お前は月の光りで水が増すのを見たと言つて知らせたが、一躰あの比何をして居た。

忽焉襄は赤面したり、少年の血は駟よりも早く滿面に走せ廻

るなり、父は注視して少しく奇しみ乍ら、

エ、返事をお仕、

何も惡るいとはいたしません、製造場に居りましたので。

仕事をしてか。

イ、エ仕事は致しません、大勢は起き出て火を點けて河を見て居ました、が私しは起ました：火がありません：何しに起たのか。

鋭どく追つめて父に問掛玉ひたり、恰かも代言人の攻撃の如くに、獵師が兎を追へる如くに、裏は復たび躊躇して赤面したるが、彼よりも余は先づ勁氣をうたせて心配したり、

何しに起た。

固より惡るいとてはありません：が：私しは此樣に大きうても字を書くとが出來ません：デスが今日文太郎さまから敎わりましたのを、忘れますまいと思つて壁に白墨で手習ひをして居ました：決して外に何を致したのでもありません。

夫だけか。

ハイ。

父は其儘沈みて無言なり、又暫らくして、

裏。

何か御用で。

モウ仕事に行く時だらうデ。

ハイ、只今參りかけて居ります。左樣ならッ、何か外に御用が。

手に帽を提さげ、從然、主人の前に立ち、滿面正直と勇敢とにて滿ちて答へを待てり。嗚呼かゝる僕を持ちたる主人こそ誇るべき哉。父は靜かに、

裏、お前は昨夜大層の働らきを仕て呉れた、何か褒美を遣らねば成らぬ、

言いつゝ兩手は自然とポッケットに入りたり、裏は直ちに退ぞき去り、

有がたう御座いますが、戴きたくありません、御主人の爲に働らいて、御主人が之を承知して下すつたのが何よりの褒美です。

微かに顏を赤め乍ら、早や出て行きたり、帝王の如くに鷹揚に濶歩しつゝ、金嚢を提さげたる人の如く爽快らしく。

見送りて父は余に向ひ、

何か裏を喜こばせるとはなからうか、文太。

余は一つ其を承知せり、之は久しく前より考へしとにて切度裏に取りて何よりもの幸福、また余に取りて此上なき幸福なる只だ一つの方法を承知せり。左れば極めて得意らしく答ふるやうは、之から毎日曜日に襄と私しとを一所に遊ばせて下さい。父は啞然として、

ナンダ、其樣とか。

然れども父は笑ひ乍ら遂に之を許し玉ひ、余は嚴肅に感謝したり。

寄書

○霞　　なでしこ

くれそむる遠山里の柳原烟と共に立つ霞哉

夕月の影ほのくらき山陰にそこはかとなく立つ霞哉

鶯

打かすみくるゝ山邊に鶯の二聲三聲きくぞゆかしき

春雨

春雨の降る山里に鶯の聲をきゝても日をくらす哉

春雨のはれし澤邊の水けむりかすみと共に立まよひつゝ

月前花

殊更になつかしき哉曉のおぼろ月夜の花のおもかげ

若菜

今朝見れば垣ねの小田の初若菜一夜の雨にもえそめにけり

○日本の爲めに涙を流せ　　佐々木笑受郎

睫は見る克はざるなり、然しながら、眼は克く社會の形勢を洞觀するを得べし、十九世紀末年の婦人——特に青年——又更に、女學生諸姉よ、天與の英敏なる諸姉の炯眼を、日本全土の狀態に放つ時に、諸姉をして、涙を流さしめ、悲しましめ、憂へしめ、又怒らしめしものは、何ぞ、必ず、其事の多くありしならん、然れども、遊女、飲酒、及び喫烟は、最も烈しき感慨を與へしならん、ある部分の男子、固より之れを嘆くなり、而して未だ能はざるなり、今や、我邦の女海は、在來の醜風陋俗を、矯正するの運動を、試みんとする、或は、試みつゝあるの運に至れり、男子多年の計畫は、女子の補助を得て、否、寧ろ女子の運動は、直接にして、男子多年の計策は、其贊助たる間接の動作のみ、而して、此等風俗を矯めるべく、敏捷なる、有力なる、而かも、適當なる、働き人は女子なり、諸姉將來の運動亦偉なる哉、余は、今飲酒の禁斷に、諸姉と語らん、然れども、飲酒の害を言はざるべし、諸姉は、酒は徐に蛇の如く飲み、蝮の如く刺すと、云ふことを記憶するならん、而して、世間、之れを好むもの、之れを飲むもの、否、之れに飲まれ、之れに好まるゝもの、甚た多きなり、彼等は曰く、酒は憂の玉箒と、然しながら心せよ、昨夜の歡與は、今日の宛、昨日排列せし杯盤は、幷へ立てらる今日の小言、昨宵遊蕩の膝を枕に、吟誦せし詩歌都々逸は、今朝早く已に、床中悔の聲と變ずるにあらずや、之れ豈に憂を拂ふ玉箒ならんや、故に、予は將に言はんとす、酒は憂を呼ぶ熊手と、昔、飲むものありしが爲めに、之れを造りしなり、而して、今や、賣るものあるが爲めに、之れを飲む、或は、飲むものあるが爲めに、之れを賣るなり、此間に立て、斷然、賣らさらしめ、飲まさらしめんとする、如何に困難なる事業よ、困難なる事業は成就し易し、盤根錯節は、克く之が元帥たるなり、語を寄す、日本現時の婦人諸姉よ、諸姉の力にあらざれば、禍水を遏ること、又、飲むことを禁ずる克はざるなり、諸姉は、今、日本國人民として、數千の村中に充つる、數百萬の酒樽を、破碎すべき責あるなり、進んで天國の人民として、數百萬の樽中に滿つる、數億萬斛の禍水を、太平洋に流し瀉すべき義務あるなり、諸姉は、米國、女十字軍の記事を讀みしならん、或は、聞きしならん、彼等の手段は、固より賞すべきにあらず、又其行爲は、粗暴なりしなり、故に、諸姉の之れに效はんを欲するにあらず、只雙手を擧げて、賞讃すべき、愛ある、健げなる、彼等の意志を、諸姉の胸裡に移住せしめ、新日本の開拓地に、立たんを熱望するなり、而して、美なる日本國土、親しき日本國民を、愛する爲めに流す、一滴の涙は、克く飲酒家の心を洗滌し、又、克く酒店の毒氣を洗ひ流し、之れが爲めに謡ふ、一曲の讚美歌は、克く彼等を誘惑する惡魔を追ひ遣り、之れか爲めに祈る、熱心なる祈禱は、克く神旨を呼び起し、彼等の唇に接吻したりし毒杯を把り、地に抛て、「碎けて元の土となれ」と言ひ、慨然、恥ぢて改悔せしむる者は、實に、親愛なる諸姉の力なり、春雨柔かに降つて、萬朶の梅の花となり、花間に囀る鶯となり、又、萬頃の菜花となり、香氣の間に翺翔す雌雄

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の蝶さなる、嗚呼、今は、日本國土の爲めに、日本國民の爲めに、諸姉が愛の涙を流すの齊なり、讃美歌を謡ふべきの日なり、熱心なる祈禱を捧ぐべきの時なり、誓へよ、起てよ、日本千五百萬の姉妹諸姉よ。

新報

（此の欄內自由に轉載を許す）

○四月

二十一年四月井生村樓に於て初めて女子獨立演說なるものを催せし人あり。去年本月婦人矯風雜誌第一號出づ。去年本月婦人勸業會社なるものゝ組織を盛んに公告せしものあり。二十年四月三十日第二女學演說會あり」。元慶二年四月十九日千載和歌集成る。明治元年閏四月二十日鴉片煙草の禁を嚴にす。天武天皇十年四月廿三日詔して男女をして悉く結髮せしむ。明治五年四月廿五日僧侶食肉娶妻蓄髮を許す。」本月二十八日正午を定めて万國婦人禁酒會の世界同時祈禱會をなす。

○梅田千代女史死す

幕府の末路に現はれ出て、時勢に慷慨して遂に鐵窓の下に囚はれ死し、哀れにも

妻臥ニ病床一兒啼レ飢。此心偏欲レ擯ニ戎夷一。如今死別與ニ生別一。唯有ニ皇天后土知一。

の一詩を殘しける梅田雲濱君の未亡人千代女史は、故人逝けるのち三十年よく貞操を全ふし、一子を愛撫し后生を敎育せられつるが、本月十四日六十六年を盡期として死去せられたり。

○是れ何人ぞ

下總北相馬郡取手驛の宮崎角二郎氏は書を寄せて云く、

（上略）小生が敬愛する先生よ不許治郎爲市長の伏役を拜讀せしは確かに貴社雜誌第百五十三號なりき然るに廿二日の東京朝日新聞は報じて云く某は政友に離れ藝妓を身請けし金儲けせんとすと風は平等に吹く治郎は英國に責められたり某何んぞ我國に於て許さる可けんや小生は憶うる謹嚴なる先生の筆を假りて彼が名與の幾分を社會より奪ひたく存じ候云々

果して是れ何人の謂ぞ。

○妻の財產と女權擴張

附り、獨乙國ミュンヘン府來報

社會上に於て女子の權力の少なき一大元因は、女子に固有の財產なきが故なり、女子に固有の財產なきは遺產法の不公平なると法律の保護の至らざる所あるが故也、左れば先女子にも財產を遺傳するとの習慣を生ぜよ、次に女子の財產を婚姻後にも保護せよかし、と禱りたるや久し、而して今や將に發布せられんとする民法に於ては妻產保護の一條例を存するやに傳聞す、是れ何等の快報ぞや」。之に付き近時獨乙國ミュンヘンに留學する農學士豐浦眞里氏の通報あり、云く、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女權擴張の一件當地（ミユンヘン）にては如何やと心掛け兼々人にも問ひ質し候處ろ隨分權力盛んにして女將軍の有様なきにあらず然し當地女權の盛んなるは一理あることにて其儀は全く古來財産分配法の然らしむる處ろかと被存候當國中にても處により分配法の相違は有之候得ども一家の財産は男女を問はず子供等に平分するか若くは親の遺言にて長子或は最愛の子に多額を與ふるともあれど次男にまれ三女にまれ少なくも其四分の一以上の分配を受るの定めなれば上下貧富を問はず女子と雖ども相應の財産を有して人に嫁し既に嫁したる上にても妻の財産は夫の得て自由に蕩費する限りにあらず妻死すれば之を子に分ち子なければ之を里方に歸すの定めあり妻にして既に財産を有し其上相應の敎育はあり如何に邪見の夫とても勢ひ其妻を重んぜざるを得ず當地女權の重き元因は大略右の如しと申事なり但し當地の婦女は噂に聞ける英米婦人の如く威張るものは至つて少なき様見受申候。

○當今の禁酒事業

近年我國に於て著じるしく進達したるは禁酒上の事業なるべし、現に成立ち居る同主義の協會惣じて左の如し、

大日本節酒會　東京禁酒會　婦人矯風會一派
神戸婦人禁酒會　岡山婦人禁酒會　北海禁酒會
反省會（西京）　横濱禁酒會　北總禁酒會
福島日本禁酒會　北羽禁酒會　萬國禁酒會高田支部
北海道石狩國厚田郡樺法華全村禁酒會
北海道後志國久遠郡奥尻全島民禁酒會
京都禁酒會　豐後大分禁酒會　伊豫宇知島禁酒會
横濱望の隊　武相矯風會　長瀞禁酒會
高知禁酒同盟會　上毛禁酒會　野州馬頭禁酒會
信州高遠村禁酒會

吾人は此等の會が互に連合一致して、日本帝國の隅より隅に至る迄でに活運動せんことを熱望す。

○何等の賄賂なるぞ

去二十六日の「日本」評林は賄賂功と題して左の如く謳へり、

樹黨成朋市會中。說何卑劣雖何雄。免租全賴賄賂力。廢案誰知賄賂功。一萬黃金投暗夜。三千紅袖笑春風。到頭分肉無其窮。興怪同盟訴不公。

許云。樹黨成朋。弄權市會。此尙可恕。至若其免租。賄賂廢案。卑劣亦甚。世無陳平。分金不公。竟使同盟抱憤激。何等怪事。何等醜聞。許由再生。亦洗耳于槃陀之流矣。

玉纖揮刃刺箱奴。蹤蹟感君深恤恩。宵道翻騷笑長髮。議場睥睨見圓顱。春風北里甚繁奴。夜月南崎好倒壺。一萬黃金何足惜。寄樓無復美人租。

實あるか、嗚呼是れ何等の悲しむべき歌ぞ、神學者云く必竟惡魔も亦た神の爲に使はると、左れば此の長髮圓顱を驅つて道德上の運動を爲さしむる日本大勢の趣むく所ろは則ち感謝すべきなる哉。

○熊本人の大恥辱

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

去る二十六日の報知新聞は、墺國皇族ハンツリー殿下が熊本に滯在中の景況と云ふ來信を載せて云く、

皇族の一行は去る十五日を以て來着ありし處何物の周旋にや當地二本樹街の東雲亭と稱する料理屋を借切りて其の旅館に充てたり此の二本樹とは熊本の遊廓にして東雲亭とは四面妓樓に取卷かれて其中央に孤立せる料理屋なり東京ならば吉原の金子とでも云ふべき所なれど實は是れよりも尚ほ一層妓樓に接したるものなり固より地方の事なれば外國皇族の旅館に充て適當なる場所を見出さんは隨分六ヶ敷とには相違なきも遠來の外國皇族を斯る不潔の地に投宿せしめざるも何とか手段はありそうなものなりと心あるものは皆な眉を顰めり且又た當時右の旅館の庭前に在る池水の欠乏を増さんが爲め坪井川の一端を堰き留め其水を引て該地に注き入れたるの一事は更に一層の物議を招きたり此の坪井川の水流は百貫石港より熊本にまで荷物を運搬する公共の河溝にして日々上下する小舟は其數幾百艘の多きに及ぶを知らず然るに之を堰き留めたるが爲め營業上ハタと差支を生じ糊口に窮したる者ありしを以て愈々物論の種子となれり」と

公水濫用は民權を害するの處置たり、是れ亦固より容赦す可らず。然れども外來の貴客に向つて「熊本縣人は文明國の禮を知らず白晝客を妓樓中の魔界に招待したり」と示したるは抑そも何者の不德なるぞ、熊本人の大恥辱之に過たるはなし、嗚呼之をしも恥ぢずんば抑そも何の顏を以て文明國民に面せんとするか、咄々大怪事。

○音樂會　去る廿一日午后七時より虎の門內學習院構內にて日本音樂會の演奏ありしが當夜來集したるハ同會々員其他招に應じたる內外人等無慮六百名にして頗る盛會なりしと云ふ。

○教育品展覽會　東京府教育會の發起にて府下小學校の教育を奬勵し且公衆をして教育の眞價を知らしむるの目的にて本年五月中上野公園內に小學校教育品展覽會を開設せらるゝ由。

○結婚媒妁の統計　日本橋區檜物町一番地の結婚媒妁所にて昨年中に取扱ひたる統計は吳方四百七十七人貰方四百廿三人にして此內譯ハ左の如し

吳方

嫁	聟	小兒	內 華族	士族	平民
二九五	一四五	三七	五	二四〇	二三二

貰方

嫁	聟	小兒	內 華族	士族	平民
三七五	四一	七	二	二三一	一九〇

○東京府高等女學校の經費支出收入案は去廿六日の臨時府會にて全廢せられたり

○慈善學校　千住四丁目長圓寺住職堀川祐雄師が發起となりて南足立郡貧民の爲め一の慈善學校を設立せんとて數日前其筋へ出願したるが郡長始め贊成人も多く有之由にて郡民へ大に喜び居ると云ふ。

○加藤錦女史　東京女子師範校の卒業生にて當時米國に留學せる同女史は昨年マッサチウセッツ州セレムの女子師範校を卒業し、當時ボストン府にて幼稚園の事業を習學し、兼ねて又ヱレスレー女大學にて專科を修學し居らるゝ由。

○就學下賜金願　在西京華族の女子にして就學中最も學資に乏しき者は特別を以て御手許より應分の賜金ある旨其筋より恩命ありしを以て當賦業社生徒中の六年以上十八年以下の女子は高等及鹽津女學校同志社女學校等へ又幼年の向は師範學校付屬小學或は最寄小學校へ入らしめ其賜金願は近々五辻爵位局次長來京の時を待て同氏へ差出し傳達を乞ふ積なりしに同氏は何か都合あり今暫く來らざることゝなりしに付去廿二日履歴を添へたる願書を會館分局へ取纏め更に同氏の許へ廻送する筈なりと云ふ但し出願者は凡そ三十名なりと聞く。

○橫濱婦人慈善會　橫濱梅ヶ枝町一丁目田村繁子の發起にて橫濱婦人慈善會を開き同港の貧民を教育するの目的にて昨今贊成者を求め居らるゝ由にて不日に初會を開かるゝの都合なりと。

○箱館婦人矯風會は一昨年設立せられたるものにて是迄毎月一回の集會なりしが客年十一月より毎月二回講習會を開き多くの婦人を集め編物ぬいとり和洋裁縫等を教授せらるゝより追々入會者も增加し次第に盛大に赴くと云ふ。

○高梁婦人禁酒會の改稱　備中高梁なる婦人禁酒會は今度高梁婦人矯風會と改稱し益々其の事業を擴張せらるゝ由。

外報

（此欄內自由に轉載を許す）

○ウイルラルド孃自傳　同女史は此頃ろ自叙傳の編輯に着手せられ最早近くに脫稿のはづなる由。

○メソヂスト女子傳道會　米國なる同會の去年々報によれば當年中に三十人の女宣教師外國に傳道し、二十萬弗の寄附金を收め、無教女子の友（The Heathen Woman's Friend）と云ふ同會發行の雜誌は既に購讀者二萬人ありと。

○姦淫制止會　アンソニー、コムストック女史が會長となれる姦淫制止會（Society for the Suppression of Vice）は去二月一日に年會を開き昨年中の事業の報告を爲したるが、當年中九千五百二十三弗を會用に消費し、犯者を捕へしと凡十四人、謝罪狀を取りしと一百一通、不德の書を取上しと目方四トン（一千貫余）、不德の圖畫を取上し事三十三萬八千七百二十五枚、不德の寫眞板を取上し事二百三十枚、同じく銅版二十六枚、富籤の劵狀を取押へしと二十萬枚、同切手を取押へしと六百七十四枚なり云々。

○憲法及び經濟學　紐育商業新聞の報によれば近來米國に於て切りに憲法研究の婦人會起ると。又去るワシントンの婦人撰擧權會の年會に於てセヱル夫人が演述されたる所ろによれば、去る數月間に經濟學を研究する婦人のクラブ二百十三新設せられたりと。

小供談

本號余白に乏しく不得止此の欄を省く

多血膽汁頭大質の複性

汁質の複性より來るもの丶如し。

此性に屬する人の筋力の強さは驚くべし、殊に無色液を多分に有して然るが故に尙驚べきを覺ゆ、古より腕力に富み氣力の盛なりし人を見るに多くは此性に屬するが如し、英國に行はる丶筋力に關する遊戯に於て名だかき勇士は多く此の性の人なり、社會の種々の階級に於て此性の人を發見すべし、至尊の位を占むる帝王に於て斷頭臺上に生命を殞せし名高き罪人に於て文明の卒先者に於て此性の成立つを見る、此性に在ては額は多血膽汁質に於ける如く些少後に引込み髮の邊にて廣く上部三分の一ぐらいの所にて狹し、魯西亞のピーター大王。英王ジョールジ四世。英女王アン。米國革命の役に名あるプットマン將軍。第一世ナポレオンの侍醫たりしドクトルラレー。曠世の詩人バイロン公。米國の勇士ヘーナンの如きは此性に屬する人物なり。

其二。多血膽汁頭大質の複性。此性の特異なる點を擧ぐれば耳の後部より下に掛けては別にさほどに大ならざれども頭の前部殊に其上部は餘程大なり、身躰は痩せ方なれども若し運動を要する場合には隨分筋力あり然し强健とは申し難し、全身の風采鋭し鼻は常より小さき方なり、脣は薄くして撓め易し、頬は平坦ならずして少しく尖りたる方なり、此性の人の呼吸及び血液の循環は活潑なりと見えず、且つ此性は殊に腦部の充血に罹り易し、鬢は押し付けられたるが如く額は鬢の邊より少しく廣がり居れり、此性と混じ易きは多血膽汁質なり、躰格風采顔色質に相似たり、然し此性に在ては額上部にゆくに從ひ擴がり彼に在ては却て狹くなるの別あり言を換へて申せば多血膽汁頭大質の複性に在ては額は鬢より上部に至れば廣くなり、多血膽汁質にありて、却て狹くなりて再び廣がるとなし、マコレー公。畫工ウパンダイキ。彫刻家カノバ。の如きは此複性に屬す。

其三

其三。多血頭大及び無色液質の複性　此性は多血質或は多血無色液質の複性の如く薄き毛色艶なる肌膚に依て他の性と區別さる、其風采は豐富にし

て柔和也、此性に屬する人物は屡身丈餘程常人より高き人を見受く、此性は實に吾人人類の裝飾と申しても可なり、態度何となく優美にして思藻に富み文才ある者多し、古來より文壇上演壇上に雄名を博したる人物を見るに多は此性に屬する人なりし、然し文學などに適したる性なるを以て下卑たる荒々しき職業には不適當なり、且つ學術の研究の如き淡泊無味の學理を研究するにもチト不向の性なり、此性と混じ易きは多血無色液質の複性なり、然し此性に在つては額が上中下三段に分れ上の段の廣さは大抵下の段と同じ、多血無色液質に在つては唯二段に分れ居りて下の段の方廣し、此性に於ては上の段餘程廣がり彼の性に於ては却て收縮る、是れ此二性の大に相違する點なり、此性の適例とも云ふへき人物を擧ぐれば有名なる博士フランクリン。敎師セオドル、クラップ○「スペクテートル」雜誌の主筆として一世の文學界を動したるアヂソン○英國大法律家ブラックストーン○小說家の泰斗ウォーター、スコット等あり。

其四。膽汁頭大及び無色液質の複性　此性も亦た人類の精華とも申すべき人物を作るに與つて力あり、前の性ほど見掛は立派ならざれども其事に當りて巧みにして、何事に依らず其蘊奧に達するに適す、且此性は人をして心志活潑にして膂力に富ましむ、凡そ人に依りては色少しく淺く黑味を帶び一寸見てもさも丈夫で力強き樣に見ゆる人あり多くは此性に屬する人物あり、此性に屬する人物の動作は一躰にユタカなり、身丈は通例高き方なり、額は高く大にして上部擴がり以て膽汁無色液質の性と相分つ、鼻は少しく屈曲してあれども兩側は眞直なる方なり、此性に屬する人にして殊に才名を擅にせし人尠なしとせず、故魯西亞皇帝ニコラス。帝は當時歐洲第一等の美男と稱へられたりと云ふ、米國有名の辯士ダニエル、ウエブスター。故英の皇子アルベルト殿下。敎授アガシス。博士ゼー、エフ、ガル。將軍ガーランド。將軍カルテス。魯西亞皇帝アレキサンダー第一世の如きも此性の人物なりし

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

脈搏と云ふ事

これを心悸元進と申す。汝方指を手腕に當て給ふときは脈の搏つのを感じ給はん、この脈搏と申すは則ち血が手腕の下に在る動脈を通り過るときの運動なり、よく氣を付けて心臓の鼓動と此脈搏とを較ぶれば了度同じとなるを見給べし。

身躰の或る部分に於て血管の上面に顯はれ居る箇所あり、此脈管は皆靜脈にして動脈にはあらず、動脈はズット表皮の内部に在るゆえ外面より見ると能はず、總て動脈には新鮮にして營養分となるべき血か奔流して居るゆえ殊更に内部を通行せしめて危險を避けしめんとの造物主の聖意と相見ゆ、それ故若し誰でも動脈に疵を受けたる節は早速血の流出するを防ぐ手當を施さぬときは霎時にして其怪我人の一命に繫るべし、ある所に一人の若き職工あり此禍に罹りて生命を殞したり、自分の預り居る機械を取扱い居たりしに不圖した過失にてひどく足を傷け出血夥しかりしかば朋輩の者ども驚きて急ぎ走り來たれども、「如何せん術も心得えず、病院に連れ往くべしと言ひ出すものあれば宜しからんとて、一人は車を雇ひに往けば一人は傍に在るものを手當り次第に取つて疵所にあてがい血を止めんとぞしたり、然しかゝる場合には如何にせば宜しきやを心得ぬ人達ゆえ總べての心配も水泡に皈せり、兎角する中、車も來りければソット右の怪我人を抱き戴せたれど病院には數十町隔りたる所ゆえ、病院に達するまで如何あるべきと人々危みけるに案に違はず道すから若者は段々と弱り來り、病院に達し床の上に横へ醫者の診察を受くるか受けぬ内にはや事きれたり、是は全く動脈の出血を防ぐ手段を施さゞりし故途中にて多分のよき血を失ひ、爲に身躰の活力を減じ遂に死したる也、かく物事に不知案内の者はあたら貴き生命を失ふと醫者が殘念さふに申したりと云ふ。さて翌日母親が吾兒の變事を聞き病院に來り空しく屍の横はりしを見たるときには如何に悲しかりしならん、又母親と同道して來りたる一人の女子も如何ばかり歎きたるとならん、右の女子と云ふ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

恐るべきは無學なり

は同じ職工場に使はれ居り後には前の若者の妻になる約束ありて、二人は未だ家を持には早ければとて共に辛抱して主人に仕へ已に四年を過ごし、二人とも若干の貯金も出來たるとあれば其中には一處にあらんとて兼々小さき家など見付て居る最中、思はずも變事の起り來て思ひ設けし事も水の泡となりたり、これを見ても世に無學ほど恐るべきはなく、大事な生命さへ其爲には失ふとあるを知るべし、されば右樣の場合には如何にすべきものあるやと御尋問あらん、斯し給へ、何でも血が心臓から疵口に達する道筋を斷ちきるなり、疵口に如何ほど澤山繃帶や手巾を當てがいたりとて何の効なし、若足に怪我せしときは時を失はず疵口より上部を手巾にても宜し、緊く縛りて血液のそれより下部に來るを防ぐべし、その縛り方は先二重ぐらいにくゝり、小さき棒切をあてがいて二三度扭るべし、然すればもはや血はその下に循環せざるべし、これは勿論眼前の危急に應ずる方法なれば早速熟練の醫師に依賴して療治を受くべし、

若し傷所足部或は手の如く容易に手巾などにて縛ばり得ざる場所なるときも矢張り前と同じ道理にて血を止むるとを得べし若し動脈の出血なれば、疵口の上部を強く壓しつくべし、又若し靜脈の出血なるときは下部を壓し付くべし、出血の夥しきは危險なるものなれども殊に動脈の出血は早く止むる工夫を施さゞれば一命を失ふとあらん、なぜあれば血液動脈を通行するときは靜脈を通行するときより速力強きゆえあり。

第八　食物の成分

牛肉は何から出來たるものなるやと諮ねられたるときは汝方は何と答へ給ふや、或る方はそれは肉なりと申さるべし、成程一種の肉に相違なし、然し化學者に賴み分析して貰へは樣々のものより出來て居るとが分るべし、其外吾人か日々食する品一として單純なるものはあらし、先づ吾人の身躰を以て論ぜんに此身躰は精神の寄る所にして最と貴きものに相違なけれども矢張り一塊の肉に過ぎず、夥多の元氣相合りて斯樣に驚くべき組織を爲した

産褥のこと

由らざる可らず。後産を分娩たらば看護婦は之れを大切に致し置き、醫師の撿査を乞ふべし、然らざれば後産の欠損したる部分子宮内に殘り居り後患を遺すの恐れあり。

第四章　産後攝生法

分娩終りて後産褥にありて攝生する間を産褥期と云ひ、婦人を褥婦と云ふ。産後の養生法は慣習の異に從て各國大に差違あり。今左に述ぶる所は本邦の婦人に便利にして且攝生法にも適ふならんと思考するものなり。

産褥の位置

古來本邦の習慣として出産の後居直りと稱し、産褥婦を産床より徊徊出させ別に設くる所の産椅に座せしむるにあり。産椅に座すれば前後に寄り掛り又左右に臂を休むるを得て大に快きが如し。然れども産後直に其身體を動す時は或は大出血を來たし或は眩暈卒倒の恐あるのみならず、久しく産椅て座して膝を屈するより血管及神經を壓迫し下股に浮腫麻痺等を發し、又增大したる子宮の重に由り子宮前に傾き或は下方に垂り難病を惹起すの憂ひあり。然るに既に述べたる方法に從て二葉の油紙を用ひて産床を設くる時は居直りをなすに及ばず。又枕を高くして仰に臥する時は浮腫麻痺或は子宮病等を起すの患ひなし。一ひ産椅に座したる婦人をして右の方法に由て仰臥せしむる時は、毎に仰臥の産椅に座するよりは安易なりと申すべし。萬一何にか止むを得ざる事情ありて産後直に産床を移し或は衣服を着替るとあらば、一人は褥婦の肩を支ひ一人は其腰部を保ち、深く用心して之れを行ひ、褥婦は決して自ら其身體を動す可らず。

産褥婦の衣服

出産後婦人は常に惡寒を感ずるものなれば毭子或は小夜着を纏ひ温保すへし。蓋し褥婦の身體を温保し過くる時は出血及疲倦を發すの恐あれば既に身體温くなりたらば餘分に纏ひたるものは漸次に之れを除くへし。出産の後は腹部に厚く綿を當て繃帶若くは服帶にて纏ふへし。斯くすれば子宮傾き或は下垂し或は出血するが如き患を防き腹の平時に復するを助け又下腹に力なき感覺を除き大に快きものあり。褥婦ハ發汗すると多きもの

なれば數々襯衣を交換て寒冒に罹らざる樣注意すべし。

清潔を要すること

産後産褥婦の最も恐るべきものは褥熱なり、褥熱の發するは清潔を怠るより來るものなれば之れが豫防法をなすと最も緊要なることとす。産後には醫師若くは産婆の差圖を得てエルリガートルを用ひて膣及子宮を百倍位の微温石炭酸水にて洗ふべし、之れ一は不潔物を去り一は子宮の收縮力を促すの効あるものなり。エルリガートルを用ひ膣内を洗滌するとは産後四五日間毎日怠る可らず。若し出産の時に創傷を受けたる時は之れを醫師に告げて嚴重の防腐法を行ひ清潔にすること大切なり。

後陣痛のこと

産後子宮は漸次に縮小し其縮小する時に疼痛を覺へ、子宮内に停滯するものを排泄す。其疼痛を後陣痛と云ひ、排泄物を惡露と云ふ。

産褥婦の乳汁のこと

乳汁は産後直に分泌するものにあらず、通例四十八時間よりして分泌を始む、乳腺は腋下の所より張り疼痛を覺へ遂に自ら漏泄するに至る。

産褥室のこと

産褥室は既に述べたる産室を用ふるものなれば茲に精く述ぶるには及ばざれども、室内の温度高きに過ぎざる樣に注意し、空氣の流通を宜くすべし。又室内光明時は安眠を得難きものなれば窓帷或は屛風を用ひて室内を薄暗くなし、家の内外を靜にし安眠を得せしむべし。

出産の後には産褥婦其精神を安靜すると猶ほ其身躰の安靜を要するが如く肝要なれば成るべく他人と談話するを禁じ、又其周圍の人も互に談笑するは宜しからず。故に室内には看護婦のみ殘り他は盡く退き室内を靜寂にして褥婦に安眠を得せしめ疲勞を恢復する樣に致すべし。産後十日乃至二週間以内は親戚朋友と雖産褥室内に通ぜざるを良とす。况や高聲に談笑し又は喫煙飲酒等をなすが如きは固く禁ずべきことなり、妄に親戚朋友を室内に導くより褥婦を衰弱に陷れ或は種々の疾病を醸成するの原因となるは數々見る所なり。又親戚朋友等にして十日乃至二週間以内に産褥婦の安否を尋んとするならば門戸に附て其安否を問ひ産褥

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

産褥婦利尿のこと

室に入る可らず、之れ實に褥婦の健康を望むの切なるに出で却て情誼を全ふするものなり。

産後は尿の分泌を增すものなれども尿意を覺ゆるの度少し、之れ膀胱は妊娠中增大したる子宮に由て壓迫せられたりしに出產の後其壓迫を免れ多量の尿を瀦留することを得るに由るなり。產後直に尿意を催すことあらば醫師に托してカテーテルを通し或は靴形の便器若くは金盥の如きを用ひ仰臥のまゝ利尿するを安全なりとす。又尿意を催すこと頻りなれども之れを漏すこと能ざる時はカテーテルを用ひて尿を漏すべし、カテーテルを通ずるは無害にして直に褥婦に緩解を與ふるものなり。又初產の時は利尿をなす際往々疼痛を覺ふることあり、之れ尿道口の爛燗に由るものあればオレーフ油或は胡麻油を塗るべし。

産褥婦便通のこと

出產後は大便の便秘するを常とす。之れ尿の膀胱内に瀦留すると同一の理にして、妊娠中は子宮增大して腸を壓迫したりしに出產後遽に縮小して其壓迫を緩めたるに由るなり、故に出產後二三日間は便秘するも決して害なきものとす。併し三日を經るも大便の通じなき時は下劑を用ひ或は灌腸を行ふべし。昔日は下劑を用ふるの外は灌腸を行ふの法を知らざりしも今日にては藥劑を服用すると灌腸するとの二法あり、この兩法中產前產後に適するものは灌腸なり、即ち大便は腸中にありて胃中にあるにあらざれば口より藥劑を用ひ胃を過ぎて腸に至らんよりは直に腸內に藥液を灌注するに如かず。若し止むを得ざる場合にて藥劑を內服せんとならば蓖麻子油壹匙食を一回に用ふべし。下劑の種類に由り或は腹痛を起し或は乳汁に混じて赤子の下痢を催すことあり、蓖麻子油は之等の害なしと雖亦惡心を催すの弊なきを免れず、故に灌腸を行ふを以て最も良とす、灌腸は內服藥と異り胃を害し食欲を失ひ疼痛を發する等の恐なく、又其奏効を誤ること希にして即効あり。灌腸料には三合計りの微温湯若くは同量の温湯に石鹼を溶きたるものを用ふるは簡便なりとす。(灌腸のことは妊娠の條に於ても述べたれば附て見らるべし) 若し出

産後時日を經ざるよ大便の催しある時は靴形の便器を用ひて仰臥の儘にて之れをなし成るべく身體を動搖せざる樣にすべし、然らざれば子宮出血或は子宮下垂を來たすの恐れあり。

産褥婦の食物

産後の食物は淡白なるものを佳とす。即ち粥汁葛湯麵包牛乳を薄めたるもの食塩等を用ふべし。其外茶或は麥湯を飲料として用ふるは妨けなし。

産後第二日目のこと

産後第二日目には必ずエルリガートルを用ひ、石炭酸水の如き防腐藥にて膣内を洗淨すべし。身體を動すは褥婦の固く禁ずる所なれは膣内を洗淨するにも他人に命じ又利尿をなす時もカテーテルを用ひ或は靴形の便器を用ひて仰臥の儘にて之れをなすべし。食物は粥、葛湯、麵包、牛肉茶、牛乳等を用ひ飲料は初日の如くすべし。

産後第三日目のこと

第三日目には膣内の洗淨、利尿の仕方並に飲食物も前日の如くす。此頃には乳腺硬結なりて少く惡寒發熱するものなれども赤子に哺乳せしむる時は輕快するものあり。然るに赤子の哺乳のみにて充分の緩解を得難き時は看護人をして靜に哺乳せしめ或は吸乳器を用ひらるべし。

産後第四日目のこと

第四日目には多く便通あるものなり。此時には便器を用ひて兩便をなすべし。

産後一週日を過きて攝生のこと

一週日を過ぎざる間は決して褥を離れ或は濃厚食物を喰ふ可らず一週日を過ぐれは淡白なる魚肉の如きは食して佳なり、又食鹽浴或は干葉湯を用ひて半身浴を行ふべし。

産後二週日後のこと

二週日を過ぐれば褥を離れ室内を步行するが如きは妨げなし、然れども猶ほ全く褥を離るゝは宜しからず、成るべく褥中にありて靜に其身を養ふべし。褥婦産褥室より他室に至るとあらば看護婦は其間に窓を開き或は夜具を空氣に曝すべし。

産後三週日後のこと

三週日を過ぐれば所謂枕直しと稱し褥を離れ平食をなして害なし三週日以内には數々陰部を洗淨すると大切なり。

産後四週後のこと

四週日を過ぐれハ戸外に逍遙するをよしとす然れども寒暑酷烈或ひは風雨の日を避くべし。本邦の風習として三十日或ひは三十三日を過ぐれば婦人並に小兒を宮參りせしむるを常とす、斯くの如き

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

廣告

松村介石君著　勝伯題字　看雨道人序

日本青年精神的教育 立志之礎

本月廿二日ヨリ發賣　定價三十五錢　郵税拾二錢

淑慝賢愚ノ分ル貴賤榮辱ノ差フ處皆青年ニ在リ。楊子ノ泣路、墨子ノ悲絲、今尚ホ同感ニ堪ヘザルナリ。看ヨ方今我邦社會ノ景狀ハ如何ゾヤ、才子的、苟偷的、營利的、利己的、瞞着的、隱險的、術數的、雷同的、卑近的、小成的弊風ニ傾クニ非ズヤ。可懼、可惜青年子弟ヲ誤ルモノ實ニ斯時ヨリ甚シキハナシ。著者頗ル此ニ慨スルアリ、故ニ歐米諸大家ガ其國青年精神的教育ノタメニ著ハシタル諸書十餘種ヲ鑑シ、之ヲ今日本邦青年ノ狀態ニ質シ、憤然筆ヲ操テ躍出シ、大聲疾呼、危險失敗ノ地ヲ警シメ、成功立名ノ決ヲ說キ、青年ヲシテ浮薄鄙劣ノ流俗ニ墮チズ、公明至誠ノ氣象ヲ養ヒ、精神的正確的卓犖高尚的ノ人物タラシメンコトヲ欲シテ止マス、是レ敢テ此著アル所以ナリ。若夫レ其論述スル所ヲ知ラント欲セバ、書中、青年旅ノ首途、日本社會ト日本青年、現時日本青年ノ危險、獨立、決意、精神、膽力、進路ノ方向、德義ト得喪、負債ト獨立、吝嗇ト義俠、師友ノ感化、善行ト書籍ノ感化等、其ノ他日下日本青年ニ適切重要ナル數種ノ問題ニ就テ之ヲ觀ヨ、成敗ノ理、禍福ノ道、自ラ其間ニ嶄然明諦アラン。

發行所　東京々橋區加賀町十一番地　**警醒社**

賣捌所　日本橋區本町金港堂、通三丁目丸善書店、通三丁目小林新兵衛、神田區集成社、神田錦町十字屋、銀座三丁目十字屋、大坂土佐堀三丁目福音社、神戶元町通り福音社、右之外各書林にて賣捌仕候

轉居　神田區平永町九番地　**山田武太郎**

交詢案內

（催促する勿れ　郵券十錢送れ　委細に申來れ）

● 雇ひたき方（甲）

- 十二　下婢　年齡廿歲より五十歲迄の基督信者を雇入度者あり
- 十五　召使　家內の手助けとなり小兒の世話なすべき年少女子を雇ひたし尤も音樂稽古等を學びたき志あるものを望む
- 十六　召使　家に小供の世話及裁縫等にして家事の手助けとなるべき年少の女子を雇ひたき所あり但官員の御內なり
- 十七　下婢　二十歲前後の薪水の勞を取る下婢を雇ひたし商家にて家內五人仕事はひまなり月給は一圓以上
- 十八　下婢　年齡廿四五歲にて裁縫出來數學習字等を閑暇の節は教授致すに付き無給にて雇ひ入れたし但し基督信徒ならば教會ヘ行くも家內同樣にすべし
- 一九　召使　年齡十六七才の小間使及び年齡三十才より四十才迄のキリスト信徒にして裁縫の出來る者を中働に雇ひ度處あり

● 雇はれたき方（乙）

- 六　奉公　地方師範學校卒業生にて學資に困む故就ては可成西洋人宅にて奉公人協力勉學致度依ハ雇はれたき二娘あり無給にて何地にてもよろし
- 七　裁縫　年齡廿三にして家內の手助けとならんがため內職に裁縫に雇はれ度き者あり華族樣か町家ならば大家のかたき內にて築地邊ならば通いても宜しとの其他ハンケチーフのふち縫の如きにても宜し
- 十三　教師　栃木縣女子師範學校の卒業生にて何處かの學校或は他の御內にても教授に雇はれたきものあり可成くは麴町か駿河台邊を望む
- 一九　召使　裁縫の教授を專にし其他女子學校等監督舍監留守居樣の者に雇はれたし
- 二〇　裁縫　年齡十四五才にて華族樣か或官員方の御方之內ヨ小間使に雇はれたし最も餘暇に商業授けくだされば給料は不申受
- 二四　奉公　年齡廿二才にして一と通り裁縫もいたし氣軽の生れつきにて華族樣か中以上の官員方へ中働きに奉公いたし度し給金は壹圓以上に願ひたし
- 二五　裁縫　裁縫は何れも婦人洋服にて和服にも巧なり學校若しくは華族其他高貴の御內に教師に雇はれたし

● **演說**　來る四月三日本郷壹岐坂教會々堂に於て獨乙國博士スピンチル氏天下女子てふ問題に就て演說致され候間有志の諸君は來聽あれ但し傍聽無料

明治廿二年三月　本郷區壹岐坂上　**壹岐坂教會**

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

同志社寄附金（三月廿六日迄）

金一圓四十五錢	明治女學校 有志者五名
同一圓十錢	同 マリヤの友九名
同三十錢	同 八號室
同三十錢	同 七號室
同三十錢	同 三輪貞子
同十錢	同 松井光子
同十錢	同 宮島なつ子
同十錢	同 久保とみ子
同二十錢	小石川區竹島町 竹內ゆき子
小計	金三圓九十五錢
合計	金二十三圓

東京代言人組合會長法學士元田肇君序
英吉利法律學校卒業生東京組合代言人 藤井公道君著
英吉利法律學校卒業生東京專門學校卒業生安元阿萬君

帝國憲法要義

附錄 議院法衆議院議員選擧法 會計法貴族院令 皇室典範

本書ハ總論及ヒ各論及ヒ附錄ノ三部ニ區別シ總論ニ於テハ之レヲ七章ニ分チ初メニ國家ノ意義及ヒ其要素ヲ論シ次ニ主權ノ何物タルコ及ヒ其所在ヲ論シ次ニ主權ノ要素ヲ論シ次ニ憲法ノ定義ヲ說キ次ニ憲法ハ如何ナル部類ニ屬スルヤヲ論シ次テ憲法ト行政法トノ關係ヲ說キ終ニ眞正ノ法律ヲ論シ併セテ憲法ノ精神ニ論及シ各論ノ部ニ於テハ我國憲法ノ各條ニ付之レカ註解ヲ下シ附錄ノ部ニ於テハ議院法衆議院議員選擧法會計法貴族院令及皇室典範迄ヲ悉ク掲載シタルモノニシテ本書ノ効益ハ別ニ喋々セザルモ自ラ世評ノアルアリ殊ニ讀者ニ取テ便益ナルハ之レカ質疑ニ應スルニアリ乞フ看官一本ヲ購ヒ以テ其眞味ヲ知リ賜ヘ

發賣所 東京神田區雉子町 團々社書店

發兌

三月。	二日	九日	十六日	廿三日	三十日
四月。	六日	十三日	二十日	廿七日	
五月。	四日	十一日	十八日	廿五日	
六月。	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日

定價

一冊。六錢 郵稅。一錢（但府內無郵稅）
十冊。五十八錢郵稅。十錢（同前）
半年分 一圓四十三錢 府外は 一圓六十九錢
一年分 二圓六十錢 府外は 三圓十二錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記録を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を掲ぐる毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む

一行 一回（廿七字詰）前金拾錢
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絕す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學に關係ある書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町淺々堂○同西へ入保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新乘町文明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文壽堂○横濱住吉町角田屋貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目の出尾○京都四條通小橋西へ入集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンードの○大阪備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎浜屋町虎與號○江州彦根西内大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○上佐國高知本町三丁目榮園堂○熊本文明堂

明治二十二年三月廿九日印刷
明治二十二年三月三十日出版

發行所 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社

編輯兼發行者 東京京橋區日吉町八番地寄留 巖本善治

印刷者 東京芝區源助町十一番地寄留 森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.
"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1,69 six months, *yen* 3.12 per annum, in advance.
Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B Hiyoshichô, Shinbashi, Tôkyô, Japan.

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY